

無双のその先へ

ユマサア@現在執筆休止

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者妄想爆発第二段!!

ジブリールTS無双系の作品となっております。

TSが苦手!ジブリールは女じゃないと!

という方はブラウザバックを推奨します。

目次

始まりの神話大戦

駆ける天翼

物語は激動へ

終戦へ向けて

終焉、不殺の神降し

終わりと始まり

終焉の人類最終試練

THE FATALIS WAR

AME

1

7

14

26

39

G

52

始まりの神話大戦

駆ける天翼

さてさて、ここは何処か？と問われましても、私が造られ、生きている赤い灰塵が空を覆う崩れかけた世界、その上空にございます。

さて、何故上空にいるかというと……

——正直、目的が果たせそうにないので、アヴァント・ヘイムから抜け出してきました♪

申し遅れました、私の名前はジブリール。

フリーユージェル
天翼種の最終番個体にして番外個体で、唯一の男性個体でございます。

何故私を男性個体にしたのかは解りませんが、流石に。

だってセンパイ方は皆女性個体ですし。

そして、アヴァント・ヘイムを抜け出しても実行したい目的、それは――

――我が創造主、戦神アルトシユの打倒です♪

センパイ方は私がどのような理由で造られたかは、恐らく図りかねているでしょう。

ただ、私は主が陰鬱そうに玉座におはすのを見て、そして幻想種ファンタズマを撃破し、龍精種ドラゴニアを単独で葬った時の果てない期待と闘気を孕んだ目を見て、ふと思いました。

この方は、自らを打ち倒す存在を待っているのではないかと。

実際、抜け出しても天罰は落ちていませんしね？

さあて！最強に勝つために見聞を広げましょう!!

そして、目指しましょうか……弱者のまま、最強を打ち倒す、その一手を――

——同時刻、ちょうど人間が機凱種エクスマキナに唇を奪われていたような——

「ん、ないですねえ……」

ジブリールです。う、ん？あの後、自らの蔵書を全て読み返してみましたが、あまりいいものはありませんねえ……

「一番可能性があるのは、機凱種エクスマキナですかねえ……」

正直アルトシユ様の攻撃を模倣しても、決定打にはなりませんし……

「そういえば、まだ人間は生きていたのですねえ」

これほどの過酷な環境をどう生き延びているのでしょうか……

「んう？」

もしかしたら、そこ最弱に可能性があるかも……！

「そうと決まれば、行動開始ですね！」

精霊を駆りながら、空を舞う。

これは結構気持ちいいんですよ？

「ふう、結構近くまで来ましたかね？」

かなり飛んできたので、気分的に疲れましたねえ……

もうすぐ目的地というか、観察に適した場所に着きますね。

にしても、廃れてますねえ……

自然を流用して生活しやすくしていますし、いざとなれば即逃走できるのでしょうね。

「……おや？」

一人の人間が恐らく帰ってきたのでしようが、隣にいるのは……

「まさか、エクスマキナ機凱種？」

何故こんな所に？

見たところ単独行動中の様ですが……

少し魔法で聞いてみましょうか……

「心の解析、ですかあ……」

機械にできるのでしょうか？

まあ、かなりの自己破綻を引き起こしているようですし、その破綻がどう影響するかわすねえ。

「でも、自主的に解析しようとして連結体^{クラスタ}凍結ですか……」

自主的にやろうと思った、ですか……

「この二人をしばらく見続けましょうかねえ」

実に楽しみでございますね！

この二人がどう動くか、二人ともまだギクシヤクしてますけれど、それは両者の少しの思い違いが原因のようですし、いずれ解消しますから。

そして、それを解消した二人がどんな解答を教えてくださいるのでしょいかねえ♪

今は私はこそこそと影から見守っていきましょうかねえ。

来るときが来たら、顔を出して、二人に協力するというのも面白いかもしれませんねっ!!

さあてそれではあ!!

私の戦争^{ゲーム}を始めましょうか！

物語は激動へ

JJ*??年S#月??日

しばらく経って、あの二人結婚しました！

いやあ、いいものを見せてもらいましたあ♪

異種族間の結婚。戦争の最中でお互いが怨みあっているこの世界での初めての例ですね。

多分、後にも先にも異種族間の結婚はこの二人だけでしょう。

そして、人間達は『幽霊』として活動を開始したようですねえ。

リック・ドローラを中心にあらゆるペテンで他種族を誘導して、衝突させる。

その衝突の際に発生するであろう、それぞれの陣営最高の一撃の衝突。

その衝突で生まれるエネルギーをシユヴィ・ドローラの武装で地殻下へ誘導、星のみを穿つ。

成る程、そんなやり方もあったのですね！

でも、それだとかかなりの確率で『スニースター星杯』はアルトシユ様の手の中で顕現を果たすでしょうね。

それをどうするのか、見物でございますね♪

「にしても、やっぱり上手くは行きませんよねえ。」

リク・ドーラが霊骸に侵食されて、除染液での治療を受けているのを見て思う。

「でも、とても上手く立ち回っていましたね。」

本当にビックリするほど、全て上手く誘導している。

「さて、そろそろ参りましょうか。では……」

——今、姉であるカブリールに襲われているシュヴィ・ドーラを助けて顔見せ、ですかね？

「……ごめん、ね——リク……」

空から天の一撃が落ちてくる。

それを防ぐ手立ては自分にはない。

約束は果たせなくなってしまった。

でも、せめて指輪だけは。リクに貰った心の証だけはッ!!

「典開、レイゼン【進入禁止】ッ!!」

「おや、諦めるのには少し早いと思いますが——ご安心を、貴女は死にはしませんので。」

修復術式が展開される。外界と術式内部が断絶される。

落ちてくる天撃は——

——それを上回る天撃に打ち消された。

「ジブリールっ!? 何故ここにいるの!？」

「お久し振りですね、ガブリール姉さま。何故? と問われましても、シュヴィ・ドーラを救出するためにございますが……」

まあ、それは今関係ありませんしね? それではこれにて撤収させていただきます、^{アルトシュ}創造主様にお伝え下さい、今度はその腰を上げさせてご覧に見せますと。」

「っ!? 待ちなさい!!」

そう騒ぎ立てる小さくなった姉を軽くシカトして森の^エ耳長族の旧都へ転移する。

さあ、^{クライマックス}幕引きの時間にございます。

それでは——^{ゲーム}戦争を始めましょう。

旧都たる私の拠点へ転移して、シユヴィ・ドーラの回復を待つ。

元々エクスプレキナ機凱種の持つ自己修復能力に私の修復術式が合わさって、かなりの速度で体が再構築されている。

「もうそろそろ、ですかね？」

しばらくして、損傷は殆ど回復して、シユヴィ・ドーラが目覚めます。

「……………は……………？」

「私の拠点にございます。」

「……………ッ!?フリーゲル天翼種……………!？」

「酷い反応のされかたでございませぬえ……………」

「一応貴女を救出したのでございませぬがねえ。」

「……………フリーゲル天翼種が、私を……………？」

「貴女の中の私達の評価はどん底のようですね……………」

「……………首、大好きなの、戦闘狂だから、当然……………」

「まあ、首の献上は天翼種の基本にございますが。」

それより、リク・ドーラの所へ向かわなくていいのですか?」

「……そう、だ!——リクの所へ、行かないとツ!!」

「私も連れていって下さいますか?彼とは話をしてみたいと思っと思っています。」

「…リク、に、何をする気…?」

「疑い深すぎではありませんか…?」

まあ、いいでしょう。私は戦神アルトシュ、我が創造主を倒したい。貴女達は『星杯』を取りたい。どちらにせよ、『星杯』を取るにはアルトシュ様の打倒は不可避ですよ?なので、協力を申し出ようとした次第でございます。」

「…アルトシュの、打倒は、不必要…」

「残念ですが、不可避にございます。」

仮に、精霊回廊の元潮流を穿ったとしても、アルトシュ様は『神髓』の力により、精霊回廊から放出されるエネルギーを上回る力を己に定義できます。ので、精霊回廊を穿った場合、かなりの確率で『星杯』はアルトシュ様の手の中で顕現いたしますよ?」

「…そん、なあ…」

「だからこそその協力願いです。アルトシュ様を倒せばその問題はありませんので。そして、私はアルトシュ様に誓った、アルトシュ様を打ち倒すという誓いを履行しなければならぬ。貴女達は『星杯』を手に入れることができ、私は誓いを果たせる。これ以上

ないWIN WINな関係だと思いますが、如何いたしますか？」

「……わかった、連れて、行く——でも、怪しい動き、したら——あなたを倒す……」
「どうぞご自由に。そういえば自己紹介をしておりますでしたね。私の名は——」

——ジブリール、と申します。

終戦へ向けて

「ここが、貴女方の隠れ家ですか？」

「……そう」

シュヴィ・ドーラに連れられて洞窟のような場所へやって来る。

私も例にならない獣皮のローブを纏い、精霊は体内循環に留めている。

そこに隠蔽魔法を重ね掛して見た目以外は人間となる。

「そこに……誰か居るのか？」

憔悴したような声が奥の部屋から響く。

「……ただい、ま——リク」

「シュ……ヴィ——なのか……？」

「……うんっ」

「シュヴィ？シュヴィっ!!」

「リクっ!!」

二人がハグしあう。

お熱いですねー！

「無事だったんだなっ！本当によかったッ!!」

「……うんっ！ただいまッ!!」

しかしながらあ——

「あの一、仲がよろしいのは大変結構なのですが、私のこと——忘れてませんか？」

「……あ」

「というか……お前、何だ？」

そうリク・ドーラに問われる。

ならば、顔合わせの時間にございます♪

ローブを脱ぎ捨て、姿を曝して名乗る。

「私は天翼種^{フリュウゲル}、『番外个体』ジブルールと申します。

用件は——私に創造主^{アルトシュ}を倒させて欲しいのです」

「……天翼種が、それも『番外个体』が——何故？」

「それが……私が造られた理由だからです」

「戦神を倒すのが——造られた理由？」

「最初はただの推測でした……何故自らは造られた？敵を排除するため？それは先輩方

でも普通に可能です。

では何故？我が主^{アルトシユ様}は常に倦怠に沈んでいる。しかし『挑む』という言葉、それには強く反応を示す。

なれば強者である己、それに『挑む者』或いは『天敵足りうる者』が現れることを願っているのではないかと推測しました。

そして、それは私が12年前に龍殺しを成した時に、主が言ったその言葉に答えがありました。

『龍を殺すに至ったか、【番外個体】よ——我が羽よ、お前は余を弑するまでに強くなるか?』と……」

「それは……」

「すなわち、主は己を越えることができる者を探している。そして、私は主に不完全性故の、主さえも倒しうる力を示すために造られたのだと確信いたしました」

「それじゃあ、どうやって神霊種^{アルトシユ}を倒すんだ?」

「ほう? 弱いから無理などとは言わないのですね?」

「そんなんじや俺ら人間はとづくに滅んでるっての」

「フフ♪それもそうにございますね♪」

「……リク、打ち解けるの、早い……」

「だってよ？弱者でありながら強者に挑む？最高に愚かじゃねえか、まるで俺達『幽霊』のようにな！」

「ええ、弱者だから強者に勝てない？そんな道理、一体何処に存在するの？」

「……そう、だね——確率論に『0』は、ない……」

「では、これからの道筋を共にするにあたって何かやりませんか？例えば、『幽霊』の合言葉【同意に誓って】の復唱だとか？」

「ああ、そうだな！じゃあ三人で復唱だ！」

「————せーの……」

「【同意に誓ってツ!!】」

「さて、リク。もうそろそろ、いいんではありませんか？」

「ああ、そうだな——其処にいるやつ、誰だ？」

「……驚いた。まさか天翼種が此方側に味方するとは……」

「それより、貴方。名前は？」

「名前は無いが、呼ばれている通り【全連結指揮体】と名乗ろう」

「アインツィヒ、ですか。一体何のぐう用で？」

「シュヴィ・ドーラの作戦には不備がある。それを報告するとともに、戦略を補正するた
めに来た」

「戦略に不備だと？」

「シュヴィ・ドーラの作戦を実行し、もしこの先『通行規制』を予定通り設置、起動しよ
うとも全火力の衝突を収束は偏差で不可能。加え、現在『連結体』で行動しようものな
ら相手側に感知され、交戦となる確率が98%」

「何だつて？それじゃあ一体……ッ」

「付随して報告する。機凱種は受けた攻撃を模倣、再現し兵器を作成することが可能。
複数の連結体を使えば、全衝突火力を70%以上で再現可能」

「でも、それでは……」

「そして、この作戦を実行しようとしてリク・ドローは『人間』は敗北しない」

「何？」

「何故ならば、我ら機凱種は機械。ただの道具であるが故に」

「……お前、何言ってるのかわかってんのか？」

「これが、我ら機凱種の意志であるが故に。そして——死を覚悟した時にシュヴィ・ドローが、我らに遺そうとした遺志でもあるが故に」

「シュヴィ——お前……」

「……あの時は、ジブリールが、観察してるって、気付けなかった、から……」

「でも、死というのは覚悟するものではありません。どんな状況でも、無様でも、足掻き続けて、最後に最高の結果を残すまで戦い続ける。それはリクのやっている事と変わりありません。貴女も、どんな状況でもリクに倣い、共に歩み続ければよいのです。絶対に諦めてはなりませんよ？」

「……ん、わかった……」

「……よし、それじゃあ作戦を提示するぞ……」

「どんな命令であろうと、我らは忠実に従い、こなしてみせよう」

「それじゃあ……」

× ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ ×
 ——このふぎけた戦争を、終わらせよう——

「にゃはあくー！可愛いにゃあ！修復術式が疎ましいにゃあくー！せつかくう、こんなちつちやいガブちゃんに会えたっていうのにい〜♪」

× ズリールは修復術式中のガブリールの回りを八の字飛びで飛びまわる。

÷ そのウザさ故にガブリールは修復術式に籠ったのだが、この姉、反省する気はさらさらないらしい。

その神殿に、神殿の主が顕れる、それだけで周囲の空間がねじ曲がり、空間が拡張、収縮を繰り返す。

——【最初番个体】よ、【番外个体】はどうした——

響く荘厳な声音。瞬間的に跪く。その言葉のみで幻想種を震わせる、絶対強者である主様。
アクトシユ種
アヴァント・ヘイム

「天撃の使用により、修復術式中にございます。アルトシユ様」

—— ほう？天撃をか？ ——

「はい、そして報告します。もう一人の【番外個体】、ジブリールが本格的に動き出しました」

—— ククツ、そうか、そうか ——

その、最強故に常に倦怠に沈む主が、普段見せることのない獰猛な笑みを浮かべる。「どうかなされたのですか？」

—— やつと、ようやつと、余を弑する者が現れるのか、ククツ、クハハハッ！

「御身に敵うものなど、いるはずがございません。番外個体でも決してあり得ません」
互いを殺し、殺され、その都度に魂を肉体を磨きあげる【戦争】。その概念の権化たる主に、敵うものなどいるはずがない。故に主は常に勝ち、蹂躪という戦いとも呼べぬものを見つめ、常に倦怠に沈むのだから。

殆んどの有象無象は、その最強を前に挑むことも、拒むことも忘れ逝く。そんな……

—— 挑む者なき最強に、果たしてどの様な意味がある？ ——

その笑みを一転、冷めた表情で地上を見下ろした。

その時だった ——

『全』^{ケンブフア} × ÷ × × ÷ × × ×
 『戦闘体』、^{ヒメアボクリフエン} 『偽典・天撃』 用意……』

アヴァント・ヘイム。その後方で……

『照準、偏差固定——殺すなよ?』

『了解』^{ヤウオウル}』

争いを終局へ導く、歴史的な一斉総射が行われた。

切羽詰まった、一人の天翼種声^{フリユウゲル}がアヴァント・ヘイムに響き渡った。

「後方に熱源を感知ツ!!これはツ——天撃ツ!?!」

瞬間、アヴァント・ヘイムを掠めるように放たれた幾条の破壊の閃光。

それは紛れもない、自分たちの切り札で——

「な、なんにやあ!?! 一体誰が天撃を撃つたにや!?!」

「不明です!アヴァント・ヘイム内からは何の反応も……!」

——そして、思い出す。ジブリールの活動を報告される前に伝えられた、カブリー

ルが天撃を使うに至った要因——

「にやはあ、ナメた真似してくれるにやあッ!鉄屑ツ!!」^{スクラツッ}

——くは、ククツ、クハハ、クハハハハッ!! ——

混乱の中、矢継ぎ早に指示を出したその瞬間。

辺りに響き渡る哄笑。

その声音を轟かせる偉容に、皆が目を剥いた。

——そうか！ 貴様らか！ 余を弑さんとするものはッ！ 存外早かつたなあ！ ク

ハハハハッ!! ——

「し、失礼ながらアルトシユ様！ 機凱種エクスマキナごときに御身の相手が務まる訳が……」

——機凱種エクスマキナ? なんのことだ? ——

なおも狂暴な笑みを浮かべ、笑い続ける主の言葉は、リーダーとして指示を飛ばしていたアズリールの思考を一瞬で絶ちきった。

——約束を果たしに来たか、我が息子よ……フフ、だがまあ、最強たる余に相

対するは最弱たるのも道理。なあ、「猿」 ——

黄金に輝く瞳で地上を睨む。

龍精リウセイに森精モクセイに地精チセイが虫けらのように集っている。

そして、その神意を、右の腕を掲げ、世界の法則をねじ曲げながら告げた。

——総員、構えよ ——

「「なあ!?!」」

告げられた言葉に全ての天翼種^{フリーユゲル}が目を見開く。

慌てた様子でアズリールが進言する。

「ア、アルトシユ様!?!恐らく奴等^{エクスマキナ}の狙いは神撃にございます!!」

「神撃」——アルトシユの力を、全ての天翼種^{フリーユゲル}の天撃に載せて放つ、万神必倒無双の一撃。

間違いなく、機凱種の狙いはその一撃の模倣。

だが、それさえも——

——それがどうした?——

その一言で、正気を取り戻したアズリールが叫ぶ。

「総員、天撃構え!その全てをアルトシユ様に捧げるにや!主はこの天地の狭間において最強!小賢しい者共の愚かな作戦を前に、何を恐れ惑うにや!」

その叫びに呼応して、天翼種たちがその力を開放。アルトシユの腕に捧げる。

アルトシユの白銀に煌めく十八の翼がその輝きを増してゆく。

——己が分際をわきまえよ、小賢しき塵芥ども——

——足掻けもがけ、地を這う虫けらが如何に群れようと天に及ばぬと終に識

れ——

宇宙の法則が慟哭し、その腕に“最強”が定義される。
世界が嘶き、その一撃の開放を畏れ喚き戦く。

—— 待ちわびたぞ、我が天敵よ ——

その言の葉と共に、各々の種族の最高火力と、終焉の一撃が解き放たれた。

終焉、不殺の神降し

放たれる三つの種族の破滅の光。

——アーカ・シ・アンセ虚空第零加護、エルフ森精種が作り上げた、森神カイナースの加護刻印をもつて機能する幻想種の核を自壊させる際に起こる精霊の連鎖的崩壊に指向性を持たせた兵器。
ファンタスマ

その原理上、巻き込む相手の精霊量が多ければ多いほど威力が増すものであり、全弾術式を開放すればそれこそ神霊種オールドデウスさえその破壊の燃料に変える凶悪な魔法。

——ずいばく髓爆、不活性化化した神霊種の神髓を起爆させる、オールドデウス対神霊種用の決戦兵器。

刻印術式により作動する爆発の威力は単発で大陸を丸ごと焼き払う、ドワーフ地精種の切り札。

その凶悪な代物、それぞれ十八発と十二発。

そこに、契約に従い命を捧げで行われるドラゴニア龍精種の従龍による破壊の閃光、フアークライ崩哮を八発。

そして、全ての天翼種フリュイゲルの全力の天撃を束ね、戦神アルトシユが己の力と共に放つ神撃。

一発でも種族ごと滅ぼせる天撃が幾千発、そこにアルトシユの神髓の力が加わればど

うなるか——

その神撃は、アーカ・シ・アンセ虚空第零加護十八発、フアークライ髓爆十二発、崩哮を八発。それらを全て呑み込み収束し、破壊の摂理として渦巻いた。

それは、地に近づくだけで岩盤を揮発させ削つてく、世界の終焉を告げる光と化した。

そして、その終焉は唐突に逸れた。

逸れた終焉の輝きは、地を削り、山を揮発させながら進み、その先に待機していた幾千機もの機凱種エクスマキナを包み消していく。

そして、遠く離れた地の裂け目に立つ三つの影。

リクとシユヴィ、そして戦闘体ケンブファの機凱種エクスマキナの少女。

「11クラスタ、4807機の導入により、72.8%再現設計成功。同期します、レューゼン《典開》」

瞬間、少女の手から数多のコードが伸び、それを形の造っていく。

「Org. 0000 ステイル・マーター【真典・星殺し】託します」

それは、巨大な塔のような銃砲。

地の裂け目にその砲口を向ける、星殺しがそこに顕現した。

「それでは、わた、当機はこれより戦闘に向かいます……お二人とも、ご武運を」

そう、飛び去っていく最後まで機械と己を偽った少女を見送って

「……さて、あとはアイツらがやってくれるのを信じて待とう」

「×……きつと、成功……する、よ……」

「あぁ……」

÷ × ÷

「大人しく、主を殺されろって言うつもりかにやア!! 鉄屑がア!!」

縦横無尽にアヴァント・ヘイム上空を飛び回り玉座の間を目指し、攻撃を加えようとする天翼種を的確に殺さずアヴァント・ヘイムの陸地へと落としていく機凱種。

それだけではない。アヴァント・ヘイムの周囲まで囲い尽くす機凱種はこれを好機と攻めてくる他種族に対しても人命を削ることなく、その船体のみを落としていく。

「鉄屑がア!うちらが “天撃” だけのバカの一つ覚えとでも思ったのかにやア!」

とアズリールは叫び、頭に浮かぶ光輪を複雑に破綻させ、眼前にその歪みをぶつける。 “空間転移”、天翼種の行える悪夢の所業の一つ。空間を歪ませて視認した場所、一

度訪れた場所に転移する戦線を無視する悪夢のような代物。使用時に生じる空間の歪

みを、眼前を飛び交う機凱種エクスマキナに叩きつけ、何機かが蒼い光を放って爆散するのを視界に捉え、そこで全ての力を使いきったアズリールは玉座の間に続く扉に寄りかかる。

そこに、絶望的な言葉が聞こえてきた。

「【解析体ブリユーファ】より、【指揮体ベフエール】へ、天翼種フリユールの空間転移原理、解析完了」

「なあ!?!」

機凱種エクスマキナは、受けた攻撃を解析、模倣する種族。今まで、自己作用故に解析されることになかったそれを攻撃に使用した。それを遅滞きながら思い出し、後悔するアズリールの耳にその行動の結果が入ってくる。

「【設計体ツアイヘン】より残存機へ、模倣武装シユラボクリフエン【偽典・天移】設計完了、同期まで3秒、同期しま

す」

「【全連結指揮体アインシュイヒ】から全機へ、周囲への対応が終了し次第、目標地点へ——転移せよ」
瞬間、前方から玉座の間の扉を撃ち抜く光が奔り——

「しまっ!?!」

「目標地点視認レューゼン《典開》、【偽典・天移】ツ!」

「く、そお!」

アズリールは力なく這いながら、主の袂へ向かおうと進んだ。

× ÷ 聖座の間、その奥に存在する偉容に全機がそれが目標であると察知する。
× ÷ × ÷ × ÷ × ÷ ×

—— 待ちわびたぞ、我が宿敵たる者の尖兵よ ——

—— さて、我が羽はどうした？ ——

「()に()ございますよ、アルトシユ様」

目の前に転移する。黄金に濡れた双眼を細め、笑みを漏らすアルトシユ様。

「さて、アルトシユ様。私、不肖ジブリアル。約束を果たしに参りました」

—— フフ、そうか、そうか、さて聞こうか尖兵ども……我が宿敵たらんとする者

の名を ——

『……』

—— 黙り込む機凱種^{エクスマキナ}たち、それを見てさらに笑みを濃くするアルトシユ様。

—— よい、よい……最強たる余に相對するのは誰もが顧みぬ最弱、さもありん ——

—— そして立ち上がった。瞬間、世界が軋みを上げアヴァント・ヘイムが驚くように鳴動

した。

立ち上がった。ただそれだけで、アルトシユ様の存在感、否、存在自体が増大していく。

そんな、力学的法則、熱力学的法則にも逆らったあり得ない状況に、機凱種エクスマキヤの軍勢が狼狽する。

『これはっ、いったい何が起きている!? 当機の異常か!?』

『『否……ッ!?!?』』

——最強は最強であるが故に最強……力の増減など、最強には関係あるまい——

『……全機、対未知用戦闘アルゴリズムを展開せよ』

『そして、この仮説を検証せよ、神髄とは物理的に視認可能か?』

『『肯定』』』

「なら、私がやりましょう 対一で……」

『……いけるのか?』

「そもそもアルトシユ様との約束は対一での勝負……手出しは無用です。ただ……あなた方の武装を使用させてくれませんか?」

『……了解、我らの武装、貴方に託そう。全機、ジブリアルへ武装使用許可を』

『『『了解』』』
ヤウオール

———そうかそうか、ジブリアル……
エクストラナンバー【番外個体】にして
クロイズナンバー【最終番個体】たる我が

羽よ……始めるとするか？———

「ええ、これが真正正銘、この大戦最後の戦いです」

光輪にアインツィヒから預かった四角い武装展開装置をあてる。

「『適応』」

そう呟くと、四角いキューブが溶けるように消え、光輪が形を変え、複雑な紋様が刻まれる。

それを見たアルトシユ様は更にその凶暴な笑みを濃くする。

「さあ、今宵、全てを終わらせましょう」

÷ × ÷

先制はアルトシユの無造作に払われた腕だった。

÷ その一振りのみで、払われた方向の景色が崩壊する。

「流石、アルトシユ様と言いまししょうか……」

崩壊していく景色を視界の端に納め、高速で飛び回る。

「此方も仕掛けましようか、《典開》^{レゼン}【^{アシユート・アーマ}全方交差】」

基本的な火力武装は精霊回廊の化身たるアルトシユには通じない。

ならば、その精霊に対して猛毒となる霊骸をぶつけるのみ。

霊骸により形成された膜はいとも容易く風ぎ払われる。

それは、想定済みだ。

牽制になるかもわからない漆黒の光の槍を幾本も放つ。

が、アルトシユのもとへ到達した瞬間霧散してしまう。

「やはり、これでは無理ですか……」

——諦めるか？【^{ジブア}最終番個体】——

「そんな訳つ、ないでしょう!!」

目まぐるしく変わってゆく景色、移動によるもの、破壊によるもの、ただの余波で削られたもの。

それらが視界に入り、そして流れていく。

飛んでくる精霊の塊を裂けるものは斬り裂き、裂けられぬものは受け流す。

避けることは不可能、周囲を^{アイン・ブレイク}通行規制で覆い、受け流してもなお此方へ向かってくる

精霊塊を凌ぐも、これにも限界がありそうだ。

「……己の推理に、賭けましようか……」

そもそもこの戦い自体が賭けのようなもの。

ならば、あとはこの賭けに勝てるか負けるかだ。

「アルトシユ様、私はそろそろこの戦いに終止符を打とうと思いますが……」

—— ほう？ 如何にして余を倒す？ ——

「本当に賭けとなりますが……今からそれを、御覧に入れましよう」

そう言つて、両の手を掲げる。

精霊が脈動し、その手に不定形な槍を形作る。

精霊を吸収する際、光ごと吸収し黒く暗転していた羽が光を放出し、形を崩す。

それは「天撃」。

フリーゲル天翼種が全身を擬似精霊回廊へと変質させ、精霊をかき集め、それを物理的な破壊とし

て放つ全力の一撃。

十二年前ですらアヴァント・ヘイムの一面を消失させたソレは、アヴァント・ヘイムが恐れ戦くまでの一撃へと至っていた。

「参ります——」

—— 来るがいい、ジブルール、我が羽、我が息子よ ——

「天撃」

瞬間、解き放たれた極光がアヴァント・ヘイム地表を揮発させ、アルトシユへ向かい駆けてゆく。

そして――

視界が白く塗り潰される。荒れ狂う精霊の奔流に玉座の間の外にいる者たちも吹き飛ばされそうになる。

しかし、それを受けてもなお、アルトシユは健在していた。辺りを覆う粉塵の中、アルトシユの声が響く。

見事なり、我が羽よ。が……

足りぬ、まさかこれで終わ――

「る訳ないでしょう」

真後ろから響いた我が子の声にアルトシユが目を見開く。

そこには、精霊の枯渴により子供のサイズまで縮んだジブリアルが、玉座の頂。そこで白銀に煌めいている寶石の前へ浮いていた。

そして、その寶石に手を向け……

「クローリ・アーンセ
九遠第四加護」

その、森^{エル}精^フ種^フが編み出した霊壊術式の一つ、空間を封印し、それを絶対の防御とする魔法で白銀の寶石、すなわち、アルトシユの神髓を覆う。

瞬間、アルトシユの姿が唐突に霞み始める。

クク、クハッ、クハハハッ!!

嗚呼、これが……敗北か

—— 実に心踊る、素晴らしい戦あそびいだった ——

—— 誇れ、我が子、誉れ高き最弱よ ——

—— 貴様らは ——

「余の敵足り得たのだと……」

そう、空を塗り潰すような白い光を放ち消滅しようとするアルトシユを前に、ジブ
ルールは ——

「まだ、貴方の研鑽は終わっておりませんよ？アルトシユ様」

その手に握られた白銀の宝石を ——

「《適応》」

光輪に、基幹術式に押しあて、浸透させる。

複雑な紋様を描いていた光輪が、さらに複雑多岐な、そして神々しい紋様へと変貌し
ていく。

そして ——

『嗚呼、そうか —— まだ、終わっていないのだな……』

「ええ、これから始まるのです。敗北から学び、高みへと至る、終わりなき研鑽が……」

そう、自らの中で穏やかに笑う父親と、その瞬間を待つ……
そして、星を貫き通す閃光と激震が、世界を包み込んだ——

終わりと始まり

星を穿ち、貫き徹す、幕引きの閃光が放たれた。

星を殺す、その一撃を放った二リックとシュヴィ人が精霊の奔流に飲まれないように離脱した場所から、光の中心に浮かび上がるものを見つめる。

金色ので飾られた、五芒星が縁取られた神々しく煌めく多面体。

「あれが、スニアスター星杯」

「……きれ、い……」

「ああ……」

暫く見惚れてしまうも、すぐに頭を振って気を持ち直す。

「やるぞ、シュヴィ——」

「……うん、リック——」

「ゲームの神様」

「ゴミみたいなこの命だが、生まれて始めて祈る！頼むよ！俺たちは勝者じゃない、だか

「……でも、神様、なら……でき、る……」

「俺たちは、この戦争の結果を見れば敗者だ……」

「……星杯スニアスターの使用権……シユヴィ達、には——ない……」

「だから、敗者なら敗者らしく、神様他人に任せるしかない……」

「……だか、ら……おね、がい……っ」

そして、その視界に、星杯スニアスターに向かって歩いていく一人の少年の姿を捉える。

「……は、ははっ、あははははっ！」

「……ふわ、あ……」

大きな帽子を被った、目にダイヤとスペードの徴を宿した、不敵な微笑みを湛えた少年が、星杯スニアスターに向かって歩いていく。

「やっぱり、居たんだな、お前——」

「……あれ、が……遊戯ゲームの……神、様……」

一度、此方を振り返りその不敵な笑みで笑いかける神様に……

「なあ……また、ゲームしようぜ？ 今度こそ絶対勝つて見せるから——」

寄り添う最愛の少女の手を強く握り、付き合ってくれた仲間たちを思い浮かべ——

「さて、アヴァント・ヘイムに戻りますか？」

『そうだな……だが急ぐはあるまい？』

「いえ、姉たちがもうそろそろ状況を把握して自らのカイシヤクを始めかねませんので」

『……そこまでか？』

「お父様、もう少し貴方という存在の重要性を考えてくださいな……」

そう自らのの中で語る父にカクツと肩を落として、天空に向かつて羽を打った。

× × ×

「あ、あ、あああああ……」

その悲鳴は誰のものだったか、空を駆ける大陸アヴァント・ヘイムを根城とする

天翼種は皆一様に主なき玉座の間にて項垂れる。

戦況を握っていた我らは敗け、主は倒された。

機凱種はとうに去り、その場は重苦しい沈黙と嘆きに包まれていた。

「……嗚呼、負けた、終わってしまった……」

「……アルトシユ様は何処に……何処に……」

うわ言のようにふらふらと、生気の失せた顔で歩く天翼種達。

「……ああ、もう、主は、アルトシユ様はいないのか……」

誰の眩きだったか――

「……ならば、戦が終わり、主もない我等に、如何なる意味がある……」

一人の天翼種^{フリーゲル}が、その手に槍を作り出す。

そして、自らの胸にそれを向けて……

「誰が終わりと言いました？」

そう、澄んだ声が響き、胸に向けられていた槍が砕かれた。

「……ジブ、リール……」

「ジブ、ちゃん……？」

既に天翼種^{フリーゲル}の光輪の面影はなく、神々しく複雑多岐な紋様の光輪を頭に浮かべたジブ

リールが玉座の間に舞い降りる。

「ジブリールウウ!!」

一人の天翼種^{フリーゲル}が槍を作り出し、ジブリールに向かって突貫する。

が――

「十の盟約その一、『この世界におけるあらゆる殺傷、略奪を禁ずる』」

盟約の力でジブリールに害なす槍は霧散した。

その盟約の力に振じ伏せられた天翼種^{フリーゲル}は座り込み項垂れる。

「……ジブちゃん、何しに来たにや……」

俯きながらアズリールが問うた。

「いえ、勘違いされておられるようなので訂正をしにきただけですが？」

「……勘違いだと？」

ラフィールがジブリールの言葉に眉をひそめる。

「はい、どうやら皆様、アルトシユ様が死したと思われているようですので」

「……殺したのはお前だろう？」

「いえ、アルトシユ様は死んでおりませんか？」

「はにや？」「うん？」

アズリールとラフィールが首を傾げる。

「はあ〜」

ジブリールはため息を吐き……

「——神髄顕現——」

瞬間、世界が鳴動した

「神将意通、神格設定『底辺』」

そして暴威を撒き散らしながら……

『聴け、我が羽よ』

項垂れていた者たちが顔を上げる

「アルトシユ……様？」

『我等の路は未だ終わらず、我等はこれより研鑽へ入る』

「研鑽……」

『我らは敗れた……それこそ、本来とるに足らない者共に……』

フリーユゲル
天翼種たちの顔に影がさす。

『だからこそ、なぜ敗れたか、なにが我等に足らなかったのか……それを、この争いのない。しかしながら遊戯による抗争が起こるであろう世界にて研鑽を行う』

『そして、もう一度最強の座へと至らん』

『~~さ~~あ、^{ゲーム}研鑽を始めよう。我が羽たちよ』

~~×~~ ~~÷~~ ~~×~~ ~~÷~~ ~~×~~ ~~÷~~ ~~×~~ ~~÷~~ ~~×~~ ~~÷~~ ~~×~~ ~~÷~~
 | | | | | | | | | | | |
 誰にも作られず、誰にも望まれず、誰にも願われず
 | | | | | | | | | | | |
 ただ己の意思で、獣から二足で立ち上がり知性を手にした名もなき種族、人間

……

——そんな君たちに敬意を評し、唯一神として名を与える……

人類種、^{immunity} 免疫と——

そして——

「知性有りしと自称する、^{イクシード}十六種族よ!!」

声高らかに、唄うように、不敵な笑みを浮かべた少年の姿をした唯一神^トは告げる。

「亡き意思【アッシェイト】を継ぎ、種族の同意【アッシェント】を成し、十の盟約に基づく【アッシェンテ】をいざ仰げ！」

——今日この日、世界は変わった——

——さあ！ゲームを続けよう!!——

× ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ × ÷ ×

月日は流れ――

「……シユヴィ……今まで、ありがとな……」

「……うん……」

「ジブルールも……」

「どういたしまして、ですか？」

「ははっ……」

一人の人間の命が終わりを迎えようとしていた――

「もう一度言いますが、本当にいいのですね？」

「……ああ、死ぬのなら人間のままがいい……」

「……そうですか」

「……わりいな、ジブルール……」

「気にしないでくださいいな」

「……なあ、シユヴィ……」

「……なあ、に……リク……」

「……お前はそのまま、この世界を楽しんでくれないか？俺の分まで……」
「……え……？」

「……せっかく、俺達で変えた世界なんだ、楽しまなきゃ損だろ？」

穏やかな笑みを浮かべそう言うリク。

「……ねえ、リク……？」

「……どうした、シュヴィ……」

「……シュヴィ……リクに出会えて、本当によかった……」

「……ああ、俺も……」

「……シュヴィ、本当に幸せだった、よ……？」

「……俺も、幸せだったな……」

「……本当に、愛してる、よ……」

「……ああ、本当に、愛してる……」

そして、静かに目を閉じる。

そして、シュヴィが悪戯つ子のような笑みを浮かべた。

「……ジブルール、よろ……」

「はいはーい、了解しました！」

魔法陣がリクの下に広がる。

「この世界、輪廻転生はごさいません。すべての魂は精霊回廊へ還るがために。ただし、新たに死した魂は暫く肉体に留まります」

故に――

フリユーゲル
「天翼種化術式、起動します！」

「……ジブルール、れつつ、ごー……」

「二度は人として死に至った。なれば二度目の人生はどのようになってもいいですよ
ねエ？」

「……約束破るの、許さない……」

「それでは、参りましょう!!」

ソフト・フリユーゲル
「天翼種化！」

「…………あれ？」

「…………ジブリール、ないすう…………」

「成功でございますね！」

「…………つてうおい!?何で生きてるんだ何故羽が生えているう!？」

「さようならそして、おかえりなさ〜い！」

「…………へえ〜い…………生き返った、気分…………どう…………？」

「…………ジブウリイルウっ！」

「いえ〜シユヴィと以前にゲームをしたときにリクが死んだ際に生き返らせることを賭けの対象にしたチェスをしましてね?それに見事負けまして、生き返らせることになりましたー!」

「…………シユヴィ…………」

「…………約束、破るの…………絶許…………」

「はあく。分かったよやってやるあ!本当の終わりまで付き合うよ!」

「…………ふ、勝った…………第三部、完…………」

「シユヴィも染まりましたねえ…………」

そんな、何気ない会話をしながら、三人は新たな門出を迎えた。

「さて、ではチェスでもしますか？」

「勿論2対1だよな？」

「そつちの方が面白いでしょう？」

「ハッ、何時ものように勝つてやるア！」

「……ジブリール……かまん、かまん……」

「さあ、ゲームを始めましょう！」

「「^{アツ}盟約に誓^{シエ}つて^ン！」」

旧き神話は永久へ続く——

終焉の人類最終試練

THE FATALIS WAR GAME

人類最終試練の魔王、アジィダカーハ討伐から数ヶ月。

箱庭は騒がしき平穏を取り戻し、修羅仏神やそれに属する者達、その下で加護を受けギフトゲームに参加しそれぞれのコミュニティに貢献する者が元気に、しかしながらも殺伐にその生を謳歌していた。

ただし、アジィダカーハを超える史上最凶最悪の人類最終試練がこの神々の箱庭に降臨するまでは、の話だったが……



そんな、平和が崩れ落ちる数刻前、『旧アルカディア同盟』の主格である『ノーネーム』
本部——

「なああにやってやがるんですかア！この問題児様方ア!!」

「ヤハハハハッ！向こうがケンカ吹っかけて来たんだ！相手してやんなきゃ向こうに悪

いだろ？」

笑いながら目の前で土下座する聖銀鎧集団を弄り倒した上で桃髪のうさ耳少女に反省の欠片もない言い訳する金髪の少年、逆廻十六夜。

「そうよ黒ウサギ、向こうが売って私たちが買った喧嘩よ？ 正当性は勿論、報酬もこんな」

そう言つて、明らかに箱庭下層では見かけない希少鉱物を含む財宝の山を指差す赤いドレスの少女、久遠飛鳥。

「苦勞サギ、まだ慣れてないの？」

「イントネーションに悪意を感じますし慣れてたまりますかアー！これをー」

ここぞと黒ウサギと呼ばれた少女を名前と状況で煽る、物静かな雰囲気の少女、春日部耀。

コミュニティ『ノーネーム』の主力メンバーである。

神霊級の恩恵を砕く上に、山河を砕き、その上で星を叩き割る圧倒的な火力に、武器による攻撃を無効化する獅子座の太陽主権を所有した規格外第一人者、逆廻十六夜。

神霊の先祖返りにして、その恩恵である制限なき《威光》を持ち、最高峰の希少鉱物である《神珍鉄》をもつて精霊たちが作り上げた、純血の龍の一撃さえ防ぐゴーレム『ディーン』を含む様々な恩恵武装を所有する少女、久遠飛鳥。

『旧アルカディア同盟』所属であった春日部孝明の娘にしてアルカディア同盟の正当な後継者であり、神獣や幻獣などのあらゆる生命の力を混成し、己の力、武器とする恩恵《生命の目録》とその副作用であるキメラ化を防ぐ、魔王デイストピア由来の恩恵《ノーフォーマー》を所有する少女、春日部耀。

そして、軍神、月神、日神の三天から恩恵を授かり、月の兎の種族特性である最高位の恩恵《審判者権限》を所有し、一度飛鳥を救うために煉獄に落ちかけるも帝釈天より神格を授かり転生を果たしたこのコミュニニティのツツコミ役兼苦勞人である努力家少女、黒ウサギ。

彼らは未だ大半が幼子であるコミュニニティを支え、人類最終試練アジッダカーハを討伐するに至った英雄達。

そんな彼らに、再び――

「もう！そんなことをやっている、と……？箱庭中枢から連絡？珍しいって、え？」

「どうした？黒ウサギ？」

「箱庭外界から干渉!? 一体何者が……っ!？」

「空が、赤く……?？」

「黒い契約書類……オイオイ、こんな時にかよ!？」

「ま、魔王だ!! 魔王が現れたぞ!!」

絶望が、舞い降りた。

ギフトゲーム名

“THE FATALIS WAR GAME”

・プレイヤー一覧

箱庭全域のあらゆる生命体（コミュニケーション問わず）

・プレイヤー側 ホスト指定ゲームマスター

人類からの選出であれば誰とも問わない

・ホストマスター勝利条件

プレイヤー側の人類に値するものの全滅

あらゆるプレイヤー側の生命の根絶でも可

・プレイヤー勝利条件

一、ゲーム盤上の戦争を人類が生き残っているという条件を満たした上で終結し、
スリーマスター星杯を獲得せよ。星杯は最も力のあるものの前にて顕現する

尚、ホストマスター側の種族の討伐は許可されるが、その他の種族の殺害はプレイ

ヤー側には許されない

二、ホストマスターの神髓の謎を暴け

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“戦神アルトシュ”印

「人類の生存が条件……？まさか——ッ」

「間違いねえ、これは人類最終試練のゲームだ……ッ」

「こんな短い期間で二度も!？」

「しかもプレイヤーは箱庭全域、つまり一層の神々も参加するってこと……？」

「ということは天軍も出張^{ヤツラ}ってくるってことか……!？」

その瞬間、周囲の光景が捻れ始める。

「なに!？」

「これは……ゲーム盤への移動!？」

切り替わる視界、十六夜たちは小高い丘の上に立っていた。

紅く染った雲、そこに空いている大穴から紅く燦然と輝く月が辺りを照らす。

瞬間――

閃光

目の前に一つの溪谷が出来上がった。

閃光

視界の端にあった山が揮発した。

閃光

海と見紛う湖が跡形もなく消し飛んだ。

「はっ。」

目の前に燃え盛るナニカが重力に従い落下してきた。

その物体、否、燃え盛るその威容こそは……

「純血の、龍種……」

そして、それは上空を睨めつけ息だえ骨を遺し灰となる。

その上空を通るは、否、重なるように堕ち行くそれは。

「戦艦、なのか……?」

そして、月明かりを遮るように影が舞う。

その背に影を湛えた一対の白翼を生やした天使のような集団。

そして、ソレらの向かう先を見ると何時からそこに現れたのか。

陸と見紛う樹木のようにも四角い箱のようにも見える、青い光を湛えた砲台の要塞

が、鯨のような遠吠えを発しながら空を翔る。

それは、その世界は——

——完全無欠に、滅んでいた